

1 東北支部インフォメーション	平成 19 年度支部 来訪トラベラー報告
2 会員レポート	(1) その1
genkimama	(2) その2
	(3) その3
3 お知らせ	お知らせ

1. 平成 19 年度支部活動報告

(1) 平成 19 年度収支報告・・・省略します

(2) 来訪トラベラー

平成 19 年度の東北地区へのトラベラー数（実数）会員数名 21

オーストラリア	1
ニュージーランド	2
フランス	5
スペイン	3
韓国	2
イタリア	2
合計	15

2. 会員レポート

genkimama

(1) その1

私は 12 月中旬より約 3 週間、オーストラリアへ初めての子連れ旅行へ行ってきました。今回はサーバス旅行ではありませんでしたが、Victoria 州内陸部にある Echuca という町に 3 泊、Queensland 州 Gold Coast に 7 泊、New South Wales 州の Sydney に 10 泊、いずれも知り合いのお宅にホームステイさせてもらいました。

そもそもオーストラリア旅行に出掛けるきっかけとなったのが、Sydney に住む友人である Peter と Celene という夫婦から届いたメールでした。メールにはこう書いてありました。「クリスマスホリデーにこっちへ来たらどうだい？こんなに近いんだから。うちに泊まってくれて構わないし、いっしょに色んな楽しいことをしようじゃないか。ノーなんて言うなよ。」

初めはとんでもない話だと思いました。ただ家にいるのでさえ子どもの面倒が大変なのに、子連れで外国へ旅行なんてありえない！飛行機の中で子どもに食事させる？とんでもない！どんな始末になることか！大体子どもが飛行機の中で10時間もじっと大人しくしているわけがない。しかも、日本はクリスマスホリデーなんてないし、クリスマスにあっちへ行くためには休みのとれない旦那をおいて独りで子どもを連れて行かなければなら

ない！不可能だ……。しかし、私の気持ちが前向きに変わったのは早くも次の日でした。

「ノーなんて言うなよ」と言われて、せっかくの申し出を断るのはとてもネガティブに思えたし、今回のことが色々なことを前向きに切り替えるきっかけやチャンスになるという気がしたのです。結婚してからずっとご無沙汰だった外国旅行をまた再会するきっかけにもなるだろうし、何より20年以上も前に会ったきりずっと会うことのなかった人たちに会ういいチャンスかもしれない。特に元気の出産についてとても心配をしてくれた人たちは、すでにとても年をとっていて、今回のチャンスを逃したら、元気の姿を見せてあげることがもうできないかもしれない。私はすぐに「We are coming!」と返信した。

しかし、準備はそれ相当にしなければならなかった。ベビーカーはどうするのか？まだ歩くのがたどたどしい元気を連れて歩き回るにはやはりベビーカーは必要だろう。レンタルをできるところはないか？現地で購入したらどうか？色々検討したが、航空会社から飛行機の入口まで使用可能で、荷物の重量には含めないというサービスがあることを知り、結局自前のベビーカーを持参することにした。

カーシートはどうするのか？

現地では空港まで友人たちが迎えに来てくれる。車での移動になるからカーシートは必須だ。レンタカーを借りるのではないので、カーシートのみのレンタルは無理だ。これも、荷物になることを覚悟して持参することにした。

食事をするためのハイチェアは？

これは、折りたたみ式でテーブルにさくっと差し込んで使えるポータブルチェアがあったので、それを持参することにした。

おむつは？

1日5枚使うとして、23日間では115枚必要な計算になる。膨大な量だ。現地で買うとしても、結局それを持って移動しなければならないなら、日本から持って行っても同じことだということで、これも持参することになった。

スーツケース1つがおむつとホームステイ先へのお土産でいっぱいになった。着替えや洗面道具など他の荷物は少なく、手提げバッグ1つに余裕で納まった。それプラスカーシート、そして、元気を乗せたベビーカー、これらを独りでどのようにして運ぶかのシミュレーションも行った。引越し荷物みたいだ……。「大丈夫？」主人が心配して訊いたが、「大丈夫、大丈夫。何とかなるから。」と私。

Sydney 国際航空に到着してすぐ、そのまま国内線に乗換えなければならなかった。国内線ターミナルは数キロ離れているので、大荷物をかかえた私はやむなくタクシーで移動した。そこから今度はメルボルン空港まで飛んだ。そこで、John と Hammie と Frank に落ち合うことになっていたのだ。

Hammie と Frank は、以前私が支部ニュースに載せていただいた『オーストラリア女バイカー人旅』で登場した Rainbow という町に住む老夫婦だ。元気が生まれた時、初めてベビー服をプレゼントしてくれ、「私たちの初孫も小さく生まれたけれど、今は 32 歳になって学校の先生をしているわよ」という手紙をくれた。だから、今回、オーストラリア行きを決めた時、ぜひ元気の元気な姿を彼らに見せたいと思った。Hammie が 85 歳、Frank は 86 歳、今回のチャンスを逃したら、もしかしたらもう 2 度と会えないかもしれない、そう思ったのだ。

ところが、彼らの住む Rainbow へは公共の交通手段がなく、86 歳になる Frank はメ

メルボルンの街中を運転するには年をとり過ぎていて、空港まで迎えに来ることも難しかった。そこで、Echuca に住む彼らの娘さん夫婦に協力してもらって、皆でそこへ泊まる

ということになったのだ。娘さんの名前は Robyn といい、John は彼女の旦那さんだ。空港へは Robyn を除く 3 人が迎えに来てくれ、そこから車で 2 時間半かかる Echuca まで乗せて行ってくれた。

私は Robyn と John には初対面だったが、家へ着くと Robyn は笑顔で暖かく迎えてく

れ、John も歓迎してくれた。Robyn は、寝相の悪い元気がベッドから落ちても痛くないようにと、床に布団を敷いてくれたり、元気が食事をするためのハイチェアも用意してくれていた。家の裏庭にはバーベキューのできるテラスとスイミングプールがあり、アプリ

コットやリンゴの木の枝に時折ワライカワセミやオウムに似た鳥が飛んで来て、耳慣れない声で鳴いている。Echuca という町の名前はアボリジニの言葉で「川が出合うところ」という意味らしい。その名の通り、Echuca は 2 つの川が交じわり、かつては内陸で伐採した材木を運河で Echuca まで運び、そこで鉄道に積み替えてメルボルンや他の町まで運んでいたそうで、輸送のジャンクションとしてとても重要な役割を果たしていたようだ。

現在は、昔の駅や船着場は観光名所となり、川はハウスボートを借りてホリデーを楽しむ観光客でにぎわっている。

レスキュー隊員である John は夜勤や休日出勤などがある関係で、休暇が年に 5 ヶ月あるという。その長い休暇を利用して、頻繁にいろいろな所へ旅行に行っているらしい。オーストラリア人の旅行好きは 22 年前と変わらないな、と思った。私は、サーバスの話を持ち出して、会員になって 1 年になるけど、仙台はあまり観光客の来ない所だから、まだトラベラーを受け入れたことがないんだ、と言うと、「私たちはそういう所へ行くわよ」と言うので、「じゃあ、あなた方が初めての私たちのゲストになるかもね」と言って笑った。

Robyn が豆腐の料理の仕方を教えてくれないか？と言うので、最後の日の夕食は私が豚汁と麻婆豆腐を作ってご馳走してあげた。なかなか好評だったので、ほっとした。出発の日、Frank と Hammie は Frank の運転で 3 時間かかる道程を Rainbow へ帰って行った。2 人とも 80 代とはとても思えないほど元気で、見ている私の方が元気をもらった気がした。

保険の関係でもう海外旅行へは行かないが、今でも国内旅行をして歩いている。John と Robyn は私たちを空港まで送り届けてくれ、ゲートの中までついて来てくれて、飛行機が搭乗するまで一緒に待っていてくれた。

今回、Hammie と Frank に会いに来て、またいい友人ができた。とても嬉しいことだ。

私と元気は 40 分遅れの飛行機に乗って Gold Coast へ旅立った。

(2) その2

さて、Gold Coastに着いたのはもう夜も遅い時間だった。飛行機を降りて歩いて建物の中へ入ると、年老いたDorothyが待っていた。Dorothyは息子のGaryが仙台に住んでおり、6年前に一度仙台で再会している。その時と比べると大分年をとった印象を受けた。べらべらと積もり積もった話をしながら荷物が流れてくるのを待っていたが、いつまでたってもカーシートが流れてこない。クレームデスクへ行くと、「多分次の便に間違えて乗ってしまったのだろう。明日の朝自宅まで届けます。」と言う。代わりにボロボロのカーシートを貸してくれ、とりあえずそれで家まで行った。家に着くと、Joyが玄関まで出迎えてくれた。

Joyも以前『オーストラリア女バイカー一人旅』に登場している。メルボルンで5日間お世話になった女性だ。今は年取ってしまったので、メルボルンの家を売り払って妹のDorothyとGoldCoastで2人暮らしをしているのだ。彼女も随分年老いた印象を受けた。以前、彼女は積極的に世の中の出来事に関心を寄せ、時事の流れについていくことで若さを維持しようと努めていた。今回出会った彼女はすっかり変わったという印象を受けた。彼女は今年中に自分が死ぬと思っているのだ。自分の周りの人が皆87歳で亡くなっているので、今年87歳の自分もそうだろうと思っているのだ。「私は死ぬことなんて怖くないのよ、ちっとも・・・。」と彼女は言った。「生きていても、どうせ愛してくれる人もいないもの。」私は切なくなって「私は愛しているわよ」と言った。「ちょっと待って。見せたいものがある。」私は部屋へある物を取りに行った。実は日本を出る前、図書館からスタン・ジャクソンさんの『88歳8万キロをめざして』を借りていた。長いフライトの間に読もうと思っていたのだが、結局、子連れ旅行に本を読む余裕などなく、少しも読むことができなかったのだが・・・。その本を持ち出して、現在94歳のオーストラリア男性がいかにも人生をエンジョイしているかを語った。Joyにはまだ死ぬ準備などしてほしくなかった。“Thank you”と彼女は言ったが、心積もりが変わりないようだった。私は、余計なことをしたかもしれないと思った。

連日、Dorothyは近所のクリスマス・イルミネーションを見に、私たちを連れ出してくれた。コンテストが開催されて、優勝者には賞金が贈られるのだそう。家ごとに工夫が凝らされていて、庭にトナカイやサンタのそりが光っていたり、屋根の上をサンタがそりで滑っていたり、凝っているお宅は庭だけで飽き足らず、家にショーウィンドウをこしらえて、そこにクリスマスの町並みを再現したおもちゃのディスプレイを飾っていたりする。誰でも、中へ見学歓迎なのだ。私とDorothyは長い間、そのディスプレイに見入った。

見れば見るほど凝っていて、次から次へ新しい発見がある。家の持ち主が「これはサンタクロースからの手紙だよ」と言って、1通の手紙を元気にくれた。

次の日、Dorothyは疲れていると言っていやがるJoyを、例のイルミネーションを

見に連れ出した。いっしょに中に見物に行こう、と誘うDorothyにJoyは「ここから見えるからここで待ってる」と言った。「ここからじゃ何にも見えないから中に行こう」とDorothy。「ここから見えるから行かない」とJoy。しばらく言い合いが続いて、結局Joyを置いて私たちは中へ見物に行き、また例のディスプレイに見入った。「これをJoyに見せたかったのよ」とDorothy。「わかってたよ」と私。

ある朝、Dorothyが、家に届いたグリーティングカードを見ていた。どうやらDorothy宛のバースディカードのようだ。「誕生日、いつなの？」と訊くと、「明日よ」と答えた。

そうだったのか、知らなかった。Garyも何も言っていなかった。「Garyも孫たちも一度もバースディカードも、お祝いの電話もくれたことがないのよ。それで、今度カードを送ってくれなかったら、承知しないよって発破かけて

やったの。そしたら、初めてカードを送ってよこしたのよ。」と Dorothy は言った。何かお祝いしなくちゃ……。色々考えて、結局次の日はスーパーへ行ってバースディカードと日本食材を買い、また日本料理を作って、Dorothy の 78 歳のお祝いをした。Dorothy の友達も呼んで、カツ丼と芋煮汁を食べた。

そう言えば、Dorothy にはもう 1 人 Perthe に住む息子がいて、22 年前、私も数日間滞在させてもらった。

「Clem は元気？」と Dorothy に訊いた。

「殺されたよ。」と Dorothy が答えた。

「20 年前にバカな酔っ払いの運転する車に追突されて、死んでしまったよ。」

知らなかった。日本を出る前、22 年前につけていた日記を読み直してみた。それを読んでいると、Clem がいかにかいい人だったか、改めて感じたのだった。そのうち再会したいとは思ったが、Perthe は 3 週間の旅行には遠すぎるし、彼もまだ若いから、次回へ回してもいいだろうということにしたのだ。その Clem はもうこの世にいないのだ。ショックだった。

「そういうことって起きるのよ。」と Dorothy は言った。

「Clem は死んでしまったし、Gary は日本に取られてしまった。」

私はまた一つ、老人の寂しさに触れたような気がした。

元気は Gold Coast で色々な初めての体験をした。生まれて初めてのビーチでの砂遊び、海水浴も Gold Coast だった。初めて動物園へも行き、そこでカンガルーに触ったり餌をあげたり、コアラやワニの赤ちゃんも抱っこした。オーストラリアではずっと英語の生活だったが、何だか言っていることも理解しているようだ。今までと違う食べ物も喜んで食べている。他人の家では何かと気を使い、いつものように元気に必要なケアを十分してあげることが難しかったが、むしろそのおかげで、元気のたくましい姿を見ることができたし、「もうこんなことも大丈夫なんだ」と思うことが幾度もあった。

空港へ見送りに来てくれた Dorothy と Joy は目に涙を浮かべて「もう会うことはないだろう」と言った。悲しくなってしまった。「そんなこと言わないで。また来るから元気でいてね。」と私は言った。Echuca を出た時とは違う感覚を覚えた。ゲートを抜けた後、元気は何度も振り返って彼女たちに手を振っていた。

(3) その3

シドニー空港に着くと、Celene と Peter、そして娘の Mia が待っていた。Celene と Peter とは、20 年前に私がワーキングホリデーでカナダのトロントへ行った時に出会った。オーストラリア人の Peter もワーキングホリデーで、ブラジル人の Celene はオーディオロジスト（聴覚学者：耳の不自由な人の訓練を行う人）の研修を受けにトロントへ来ていた。ユースホステルで知り合った私たちは、トロントに住んで仕事をするつもりで、もう 1 人のカナダ人の Earl と 4 人でシェアするためのアパートを探していたのだ。ところが、時期は 9 月、トロントは学生と移民の町で、9 月は現地の新年度、多くの人たちが仕事を始める時期であり、大学を卒業した学生たちや地方から出て来た人たち、外国からの移民や出稼ぎ労働者たちが躍起になって住む場所を探している時期だった。いい物件はたちまち決

まっぴら、なかなか住む場所が見つからなかった。毎日毎日、私たちは新聞の広告欄を見て物件を物色しては、電話をかけ、アパートを見に行く日々を送っていた。一度など、見に行ったアパートがとてもいい物件だったのだが、そのアパートを確保したい他の人たちがこぞって小切手を切っては我よ我よと手付金として置いていくのであった。私たちは visitors note に、「提示された家賃に上乗せした金額を支払う」と書いて、その物件を後にしたが、連絡が来ることはなかった。それほど、あの時期のトロントでのアパート探しは大変だった。結局、私たちはトロントでのアパート探しを諦め、Earl はトロントに住むいとこの家に住むことにし、私は現地で知り合った他の2人の日本人と一緒にレンタカーを借りてカナダ東部の旅行に出ることに決め、Peter と Celene は恋人同士になり、それぞれの道を歩むことになったのだった。その後2人は結婚し、シドニーに住んでいるのである。

Celene は15年前、盛岡で学会があるという、一度私の家を訪れたことがあったが、Peter とはトロントで別れたきり会っていなかったし、もちろん11歳の娘の Mia とは初対面だった。彼らはローズベイというところに住んでいて、2ベッドルームの彼らの住まいでは、Mia がリビングルームのソファに寝て、自分のベッドルームを私たちに使わせてくれた。

22年前、ローズベイと言えば、ウィンドウサーフィンをしに行くところで、公共の交通手段はバスしかなく、住むには不便なところだというイメージだったが、現在は、ウィンドウサーフィンをする人などおらず、緑豊かな公園が広がる静かな高級住宅地になっていて、フェリーでシティまで行くこともできるようになっていた。

ある日、Celene が5つ揃いの漆塗りの汁碗を出して来て、「これは15年前にあなたの家に行った時に、あなたがくれたのよ」と言った。そんなこともあったっけ？すっかり忘れていた。そう言えば、実家の台所の戸棚の奥に、ずっとしまったまま使ったことのない汁碗があって、どうせしまっておくならと思って、お土産として彼女にあげたのだった。彼女はまた「日本で食べたカスタードみたいな食べ物が好きで、あなたがレシピをくれたから、一度父親たちが遊びに来た時に作ってみただけど、うまいかなかったのよ。作ってくれない？」と言った。少し考えて、茶碗蒸しのことだとわかった。そう言えば、日本で彼女を食事に連れて行った時にどこかで食べたかもしれない。そこで、ある日の夕食にざるそばと茶碗蒸しを作った。結局、私は今回の旅行の行く先々で日本料理を作ったことになる。

22年ぶりのオーストラリアは物価が高騰していて、およそ22年前の4倍くらいになっていた。20年間物価がほとんど変化していない日本も以上なのかもしれないが、20年間で4倍になるのも尋常ではないと思った。だいたい3つ星ホテルの宿泊代が\$400~500くらい、バスなしの安宿でも\$100~200くらいが相場だ。景気がよく、大勢の人がボート遊びや水上飛行機などのレジャーにいそしんでいる。深刻な水不足で節水が不可欠だという割には、各家々に家族専用のプールがあって、そこになみなみと水を張ってある。

人々の暮らしは豊かで、彼らの消費の仕方に無頓着さを感じるほどだった。デフレスパイラルが続く日本から旅行しに行くには、少しばかり高くつく国になっていた。

私はオーストラリアに着いてからずっと疑問に思っていたことを Peter に訊いてみた。

「オーストラリアは成功して豊かな国になったように見えるけれども、これはバブル経済の一種だと思う？」Peter は答えた。「これが長く続くとは思わないよ。いずれ我々はこの好景気の後には何らかの問題を抱えることになるはずだよ。」そうか、今度はバブルがはじけてからオーストラリアに来ようと思った。私は旅先で、美しく洗練された都会で着飾ってリッチに振舞うお金持ちの人たちを見るより、決して豊かではないが必死に生きている地元の人たちと触れ合う方がずっと刺激になって好きなのである。彼は続けた。「ただ、君たちが今見ているのは一部分の

きれいなオーストラリアだよ。例えばもっと内陸へ入れば、また違ったオーストラリアの汚い部分を見ると思うよ。」彼はこの言葉で私たちがガッカリさせるかもしれないと思ったらしいが、私は彼の言葉を聞いて、むしろ少し気が軽くなった。お金の物を言わせる人たちは、お金なしでは何もできない。楽しむことも、生きることもお金がなくてはできないだろう。そんな人たちを見ても、何も学ぶものはないしおもしろくもない。気が重くなるのが関の山である。旅行をするなら、お金を消費させるために作られた場所を見るよりも、その国の決して美しくない部分を見てこそ、その国を知ったと言えるし、得るものも大きいんじゃないかと思うのである。

Peter のパソコンには Skype というテレビ電話のソフトが入れてあって、それを使うと相手の顔を見ながら話ができる。ある時、ニューヨークに住む Celene のいとこがテレビ電話でアクセスしてきた。Celene は、実は彼女夫婦も私たちと同様にクリスマスに招待していたんだと打ち明けた。そして、招待した後で「でも、もし全員来ることになったら、寝るところはどうしよう？」と考えたと言う。結局、いとこ夫婦は来ることができず、私たちだけが彼らを訪問したのだが、Celene がおもしろいことを言った。彼女はオーストラリア人を“閉鎖的”と言うのである。人を家に泊めることにも消極的だと言うのだ。私のオーストラリア人に対するイメージとは全く異なる見解だ。かつて、オーストラリアを旅行していた時、多くの人が見知らぬ私を家へ泊めてくれたし、私はオーストラリア人はとてもフレンドリーな国民だと思っていた。

彼女は言った。「ブラジルでは人がたくさん集まると、誰でも家へ泊めるし、もし人がたくさんいすぎて寝るところがなくなったとしたら、今度は隣の家の人が『うちへ来て泊まりなさい』と言って、見知らぬ人を泊めてあげるのが当たり前よ。」こんなに人を家に泊めるということに対する姿勢が日本と違うのも興味深い。オーストラリアだって田舎の方へ行けば、気軽に初対面の人を家に泊める人がたくさんいる。彼女はオーストラリアの都会しか知らないから、そういう印象を持っているのだろう。

Skype は誰でも無料でネット上からダウンロードできるし、お互いの顔を見ながら会議などもできるから、世の中にある面白くない会合や有益でない会議は、このソフトを使ってテレビ会議で済ませてしまえば、貴重な時間と高価な交通費を費やすこともなく、その結果、限られたエネルギー資源を無駄に使わずに済むから、環境にもやさしいのではなかろうかとちょっと思ったりした。

今回の旅行で、2歳になったばかりの元気は、不慣れな環境や生活習慣にもよく

順応し、この3週間で謳歌していたようだった。初めての食べ物もよく食べたし、たくさん出会った初対面の人たちにもすぐになついて、言葉も理解できるようになった。元気はオーストラリアで過ごした3週間で大きく成長したと思う。私にしても、オーストラリアへ出掛ける前までは、食事の用意も、区役所から渡された“幼児食の目安”に合うように、肉類、緑黄色野菜、淡色野菜、乳製品、穀類などすべての品目についてグラム数を量って料理し、与えていた。食事のメニューや、おしっこの回数と時間なんかもノートに記録していた。旅行中はそんなマメなことはとてもできない。旅行以前に比べるとかなりラフな扱いをしていたと思う。でも、そのおかげで親子共々一歩階先に解放されたような気がする。元気には色々な経験をさせてあげたいし、これを期にもっと色々なところへ足を運んでみようと思うようになった。3月には Celene が学会で京都に来る予定だ。また、元気を連れて会いに行こうと思う。

お知らせ

(1) 平成20年度 東北支部総会のお知らせ

平成20年度の東北支部総会を下記の通り開催します。会員の方々の参加をお願いします。

- 参加費は無料で、お弁当付きです
- 当日2008年度の会費として3,000円をご用意ください

記

日時：平成20年4月26日（土） 11:00～15:00

場所：仙台市中央市民センター 6F ミーティング室

〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡4丁目1-8

TEL 022-295-0403 FAX 022-295-0810

(2) 日本サーバス国内会議

本年度のサーバス国内会議が以下の日程で開催されます。討論事項がありましたらお知らせ下さい。

日時：3月29日（土）～30日（日）

場所：京大会館（〒606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9）

(3) 新会員

K氏

お母さんが日本人でALTとして英語を教えています。日本語は話すのは問題ありませんが読み書きは全くできないそうです。車を持っているので、1年半の滞在期間中に多くのサーバス会員を訪問したいと言っています。住んでいる自分の町はとても美しいところで、ぜひ訪ねてほしいとのことでした。